

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

1. 対象

S6年生 39名

2. テーマ

・日本の歴史・風土を客観的に理解し、英語で伝える力をつけよう。

3. ねらい

・自分の題材を、これまで学習した英語を活用して外国人留学生に説明することができる。

・学んだことや経験したことを、図表やグラフを活用してポスターにまとめることができる。

4. 実践内容

①外国人留学生向けの日本文化紹介ワークショップ

本校では、5年前より”Japan Project”と題して、外国人留学生を対象として6年生児童が日本文化を紹介する活動を行っている。これは、本校の主に2つの特色を生かした活動である。第一に、本校では1年生から英語が教科として位置付けられており、6年生では品詞や文型といった学習内容も習得する。第二に、本校は小学校1年生から宿泊を伴う校外活動を行っている。家庭から離れ、クラスメートと寝食を共にすることで集団行動・集団生活を学んでいく。6年生は、1年生から学んできた英語を活用する宿泊学習”Global Camp”として、2泊3日を外国人留学生と共に過ごすプログラムを組んでいる。そのプログラムの一部として位置付けられているのが、この”Japan Project”である。

Japan Projectでは、児童一人ひとりが自分一人でワークショップを展開する。20名程度が机を円状に並べ、あたかも屋台を開いているかのように児童は留学生に声をかけ、留学生を自分の発表に招き、それぞれが体験を伴う文化紹介を行う。一回当たりの時間は10分程度である。

本番の3か月ほど前より、児童は題材を決定する。題材を決める際は、日本文化の中から、自分が興味のあること、それから、「相手が楽しんで取り組めるもの」という点に気を付ける。例えば、書道や茶道、箸といった伝統的な日本文化、コマ回しやビー玉遊び、金魚すくいといった遊びなどが題材として設定される。他にも、兜や手裏剣、扇子、剣道といった題材を選ぶ児童もいる。いずれにしても、口頭説明や資料提示に終わらない、体験を伴うものを選んでいく。

題材が決まった後は、発表を作り上げていく。説明の文章は、まずは簡単な日本語で説明の文章を考え、その後英訳していく。原稿を書く際は、本校のカリキュラムに位置付けられている言語技術の考え方を生かし、説明する物事の順序に気を配り、主語・述語を意識しながら文章を組み立てていく。それに加え、作成した資料を提示するタイミングを考えたり、どのような体験を発表に組み込むかも考えたりと、発表をより楽しめるものにしていく。書道や茶道といった題材では、実際に留学生に書いてもらったり、遊びなら得点を付けて順位をランキングづけたり、兜であれば新聞紙で兜を折ったり、と児童それぞれの工夫が発揮されるところである。

発表の原稿・手順が決まった児童は、練習を開始する。原稿はなるべく暗記し、ワークショップの中では相手の目を見ながら、身振り手振りを使って説明ができるように練習を重ねていく。

当日は、外国人留学生相手に全員の児童が発表を行うことができた。



②留学生と過ごした宿泊学習から学んだことの発表（ポスターセッション）

本校ではポスターセッションを全学年で行っている。対象は本校1～9年生の児童・生徒、および公開研究会に来校される先生方である。6年生は、上記 Japan Project を含めた Global Camp を通して、「自分たちが学んだこと」という題材で発表を作った。活動の意義を踏まえ、自分たちが「何を学び、考え」たのかを主張に落とし込んでいく。少しずつでも習慣として、自分たちの活動一つひとつの意義を考えることが学習をメタ的に認知する第一歩である。

ポスターセッションの準備にあたっては、クラスごとに担任が指導にあたった。発表のテーマは、4～5名のグループでそれぞれ設定した。児童は昨年度学んだポスターセッションの作成方法が身につけており、自分たちで計画を立て、役割分担をし、主体的に作成していた。指導にあたっては、ポスターセッションの作法を意識させた。

先述の「自分たちが学んだこと」を主張として掲げさせるため、今年度は、事前学習の段階から「活動の意義・ねらい」を考えさせる問いかけを子どもたちに投げかけてきた。



(5) 成果と課題
① 外国

人留学生向けの日本文化紹介ワークショップ

一番大きな成果は、児童が自分たちの学んできた英語が「伝わった」実感を持つことができたということである。児童は日頃、(ALT以外に)外国人相手に英語を使う機会がほとんどない。その中で、この Japan Project はほぼ初対面の外国人を相手に発表を行うため、英語が「伝わる」実感としては非常に大きいものであったと思われる。

また、この実践は英語をあらゆる点で活用する実践でもある。この実践の中で、児童は英語で相手を「楽しませ」ている。また、相手を自分の発表へ「勧誘」す

